

先ずは下の写真を見て頂きたい。十勝では知らぬ者はないと言う「バツタ塚」である。表題の「眠れる地下の宝」即ち「バツタの死骸」等と言う積もりは毛頭ない。正真正銘の地下資源に関する話題である。が、その前に、所謂開拓当初の悲惨さを後世に伝える「バツタ塚」について若干の説明をしよう。



十勝の子供達は、バツタ塚について学ぶそうだが、意外に大人が

知らないようだ。先日、この目で確認してきた。バツタ塚を、案内板の説明文の抜粋で紹介しよう。『明治 13 年に始まり、18 年に終りをつげたバツタの大発生は、わが国の虫害史上類のないものです。明治 13 年 8 月、突然十勝の奥地河西、中川両郡にトノサマバツタの大群が発生し、日高から胆振に入り、一群は海岸沿いに虻田方面に、一群は札幌方面を襲いました。突如、大風が林の木をゆり動かすような音がすると見る見るうちに数百万数千万のバツタが飛び回り日蝕のように太陽がかげったり、地表は見渡す限りバツタでおおわれて、足の踏み込む余地もありませんでした。暫くしてバツタの去った跡は青いもの一つ見当たらず、一面剥ぎ取ったような赤土となって、作物は勿論、外に干してあった衣類までも跡形もなく食い尽くしたという異常な光景でした。バツタは、翌明治 14 年 5 月にも発生し、その勢いは前年に倍するものがあり、被害も激しくなったので、開拓使は駆除費を計上し、防除に努めたが、バツタの被害はさらに明治 17 年まで続き、防除費も年々増大していきました。明治 15,16 年の 2 年間で撲滅したバツタは、卵で 7,440 石余 (1,339 m³)、サナギで 2,223 石余 (400 m³) に達し、これをバツタの数に換算すると、三百数十億匹に相当するといわれます。バツタの害は 5 年間続きましたが、明治 17 年全道的に長雨が降り、イナゴの卵が孵化せずに腐ったため漸くバツタ騒動も終わりを告げました。これが歴史的な大バツタ害のあらましです。これから先、歩道の両脇にある大小不同の土盛りが当時、バツタの死骸を埋めたため出来たと言われているバツタ塚です。（新得町 70 年史 拓聖 依田勉三傳） 』

（閑話休題）

平成 14 年 1 月 30 日、日本の構内堀の炭鉱の火を灯しつ続けてきた釧路の太平洋炭鉱が閉山となり、姿を消した。本稿では、朔東における鉱業について概説する。

● 北海道の鉱業の歴史概観

北海道最初の炭鉱開発は、安政 3 年（1856）の幕府による白糠炭山とオソツナイ炭山であり、この何れもが、休鉱になり、この再開は、後年の事となった。

明治期早々（明治 4 年以降）開拓使は、鉱山の開発を重視し、英人（氏名不詳）、アンセル等による調査、明治 8 年には鉱山史に名を残すライマンによる全道の調査を行わせた他、自らも調査等を行った。

地質調査は、開拓にとって重要な基礎事業であったので、明治19年道庁設置に当り、明治8年のライマンによる地質調査以来中断していた全道的な規模での地質調査を再開し、全道の炭田の概況を明らかにした。

道庁設置当初20年頃の北海道の鉱業界は、やっと本格的な採炭に入った官営の幌内炭鉱と、明治16年で官営を中止した後同17年に地元の長浜氏によって再開された茅沼炭山があるだけで、あとは幕末以来民間の手によって採掘されてきた硫黄山が数箇所と石油の1箇所あったに過ぎない。当時の総産額の第一位は硫黄であった。

第一次大戦特需と不況、満州事変特需と世情に翻弄され続けた。この間、休山に追い込まれる炭鉱もあり、次第に大資本による系列化が進行した。

前の大戦においては、戦時特別配置転換が行われ、北海道の石炭業が一時的に下火になった。戦後には、再開発が進み、朝鮮戦争特需、高度成長の担い手、黒いダイヤモンドとして持て囃された。併せて新たな炭鉱開発も行われた。然しながら、相次ぐ事故の発生、円高や国のエネルギー政策の転換などもあり、徐々に縮小・閉山されていった。

そして、創業82年の歴史を閉じた太平洋炭鉱を以って、日本の近代化を支え、戦後復興の原動力であった日本・北海道の石炭産業はその役割を終えた。

以下朔東管内の主要な炭山について簡単に述べる。

I 石炭

● 浦幌炭坑（浮沈の激しい炭坑）（浦幌町常室川上流）

大正7年開鉱、WW1の好景気が終わると出炭も鈍り休山、昭和8年再開、馬車軌道も出来るなど石炭輸送の近代化が図られた。朝鮮人労働者もいた。昭和18年政府の非常増産措置により再び休山、終戦後の23年再々開し、小、中学校の増設、高校の分校開設、毎日映画上映など全盛期を迎えた。国内炭の需要減少もあり、昭和29年には、幕を閉じ、昭和42年、この地より全ての人が去り、無住の地となった。

● 尺別炭坑(東洋屈指の総合選炭場具備)（音別町尺別駅周辺）

大正7年開鉱、三菱が買収し、昭和19年には休坑、21年再開、25年には浦幌炭坑を買収し操業するもエネルギー革命の影響もあり、止むを得ず昭和44年閉山する。音別町の尺別駅から雄別炭鉱尺別鉄道が接続していた。

● 雄別炭鉱(朔東の有名な心霊スポット?)(阿寒町布伏内の北数キロ地点)

釧路から直距離30km、阿寒町の丘陵地の谷あいには、昭和30年代後半には出炭量が60万トンを超え、最盛期を迎えた。然しながら、雄別炭鉱周辺の人口が2万人に迫る勢いであったが、昭和45年2月、閉山に伴う特別閉山交付金の適用を受ける為突然閉山した。無住の地となり、今でも諸所に当時の遺構が残されており、心霊スポットとして好事家が訪れている。巨大な煙突や映画館、病院や職員クラブ、ガソリンスタンド等が残されており、ゴーストタウンそのものだ。ある者の言によれば、昔よく肝試しに行ったものだから、その影響か頭が可笑しくなった者が居るとか居ないとか。

● 太平洋炭鉱(道内第二位の炭田、82年の歴史に幕：釧路市釧路)

釧路炭田は、石狩炭田に次ぐ北海道第二位の大炭田であった。1857年に白糠石炭岬とオソツナイ（釧路市石見ヶ浜）で石炭を掘ったのを嚆矢とする。1887年に再開し、大正9年には太平洋炭鉱が創業した。昭和20年戦時の強制配置転換から復員した鉱員により春採鉱が再開、別保鉱は翌年秋に再開。戦後のこの復興期に、年間の産出量は100万トンに、従業員は、最大5000余名を擁するに至った。石炭鉱業の合理化政策により、最大ピーク産出量250万トンになるも多くの炭鉱が閉山し、釧路炭田最後の炭鉱となる。昭和60年以降は、マイナス600m前後の海底炭に挑戦する時代となったが、止むを得ず、閉山することとなり、釧路コールマインが研修事業と三分の一程度の採炭、中間処理を担当する会社として事業を開始した。

● その他

明治鉱業の庶路炭鉱(白糠町白糠)や門静炭鉱（厚岸町厚岸）があるが、省略する。

(参考：北海道史 通説第2巻、第3巻、各種のHP等)

以下次号に続く